

セ試平均点(900点満点；加重平均)は、

**文系型 13.8 点ダウンの 517.9 点、
理系型 12.8 点ダウンの 517.1 点！**

基幹科目の国語、数学Ⅰ・Aダウンで、文・理系型とも2年連続のダウン。物理Ⅰ・化学Ⅰの大幅ダウンで“理系苦戦”。英語は筆記、リスニングともアップ。

新型インフル等による「追試験」受験許可者は、972人に。

旺文社 教育情報センター 22年1月21日

22年センター試験(本試)が1月16日(土)・17日(日)の両日、全国725試験場で実施された。

懸念されていた新型インフルエンザによる大きな影響はみられず、「追試験」受験許可者は972人に留まった。大学入試センターが1月20日に発表した各科目の平均点等の中間集計を基に、文系・理系の標準型「5(6)教科7科目(900点満点)」の平均点を算出した。

文系型517.9点、理系型517.1点で、ともに2年連続のダウン。科目別では国語、数学Ⅰ・Aの基幹科目のほか、公民の各科目に加え、物理Ⅰと化学Ⅰが大幅にダウンした。そのため、理系志望者にとっては、“苦戦”を強いられそうだ。

一方、平均点がアップしたのは英語(筆記、リスニングテストとも)のほか、数学Ⅱ・B、生物Ⅰ、日本史Bなどである。

経済不況と雇用情勢の悪化を受け、学費の安い国公立大志向、地元志向が予測される中、文系・理系型とも平均点ダウンで国公立大へは“弱気出願”に走り、地元中心の安全志向が一段と強まりそうだ。各科目の平均点等の最終確定は、2月5日に発表される予定である。

■ 志願・受験状況

<志願状況：志願者数約55万3,000人で、2年連続の増加>

①志願者数、前年より9,387人増：22年センター試験(以下、セ試)の志願者数は、前年比1.7%増の55万3,368人で、2年連続の増加。

②“現役”は2年連続の増加、“浪人”は7年ぶりに微増：現役は20年に減少したが、21・22年と2年連続の増加。現役の志願者数は、高卒者数の増加(予測)に加え、過去最高の現役志願率41.0%に支えられ、21年より8,885人(2.1%)増の44万148人だった。

一方、浪人は10万6,653人で、7年ぶりに微増(21年より520人、0.5%増)に転じた。

③志願者増の主な背景：

- 今春の高卒者数は、21年の高卒者数が減少(20年より約2万4,000人、2.2%減)したのに対し、18年ぶりの増加が予測される。

- 現役の大学志願率(21年 54.9%)アップが見込まれる中、セ試受験を必須とする国公立大志向の高まり、及び私立大のセ試参加増(7大学 24学部増の 494大学 1,404学部)と短大の参加増(6短大増の 160短大)。さらに、私立大セ試利用入試では、試験方式の複線化等による志願者獲得策が拡大。
- 推薦・AO入試などで年内に大学進学を決めてしまう“早期受験組”に対し、学習意欲や学力の維持・向上策の一環として、セ試を活用。
- 新型インフルエンザへの“リスクヘッジ”(危険防止策)として、個別試験も含めた受験機会の確保から、私立大セ試利用入試も視野に入れた出願。

<受験状況：各教科とも受験者増。数学①は1万5,000人、4.2%の大幅増>

第1日目(1月16日)と第2日目(17日)の受験状況は、以下のとおり。

◇[第1日目](1月16日)

教科等	22年受験者(対前年比)	22年受験率(対前年比)	21年受験者	21年受験率
公民	317,003人(+3.7%)	57.3%(+1.1ポイント)	305,639人	56.2%
地歴	363,977人(+1.1%)	65.8%(-0.4ポイント)	359,936人	66.2%
国語	497,401人(+2.6%)	89.9%(+0.8ポイント)	484,884人	89.1%
外国語 筆記	513,267人(+2.4%)	92.8%(+0.7ポイント)	501,115人	92.1%
外国語 リスニング	506,912人(+2.5%)	91.6%(+0.7ポイント)	494,350人	90.9%

◇[第2日目](1月17日)

教科等	22年受験者(対前年比)	22年受験率(対前年比)	21年受験者	21年受験率
理科①	201,064人(+3.6%)	36.3%(+0.6ポイント)	194,029人	35.7%
数学①	377,851人(+4.2%)	68.3%(+1.6ポイント)	362,628人	66.7%
数学②	338,887人(+3.2%)	61.2%(+0.8ポイント)	328,357人	60.4%
理科②	237,074人(+2.7%)	42.8%(+0.4ポイント)	230,869人	42.4%
理科③	171,730人(+1.1%)	31.0%(-0.2ポイント)	169,864人	31.2%

- 注1. 外国語の「筆記」は、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語。「リスニング」は英語のみ。
 2. 受験者数・受験率は21・22年とも、速報値(試験実施当日発表)。
 3. 受験率(%)=受験者数÷志願者数×100

- 各教科(受験枠)の受験状況をみると、セ試志願者の増加を反映し、各教科とも受験者増となっている。特に、数学①は前年より約1万5,000人、4.2%の大幅増で、受験率も前年より1.6ポイント上回り、各教科中、最高のアップ率である。これは、国立大の教員養成系など、文系志望者の増加によるものとみられる。

また、公民も前年に比べ約1万1,000人、3.7%増えた一方で、地歴は約4,000人、1.1%増に留まった。これは、21年の日本史B(確定平均点57.9点、20年に比べ-6.4点)や地理B(同64.5点、同-1.9点)が不振だったのに対し、倫理(同71.5点、同+3.9点)や政治・経済(同69.3点、同+5.6点)が高得点であったことなどから、主に理系志望者を中心に公民受験が増えたとみられる。

- 英語リスニングテスト(以下、リスニング)は、現行課程入試が開始された18年から導

入され、今回で5回目となる。22年からICプレーヤーの形状を従来の縦長(長方形)から正方形に変えたり、「電源」「確認」「再生」の各押しボタンの位置を変更したり、様々な改良が施された。しかし、ICプレーヤーの不具合などから全国で220人(前年は249人)が、リスニング終了後(第1日目)に別の機器で「再開テスト」を受けた。

なお、今回からICプレーヤーや音声メモリーは試験終了後に回収された。

<「追試験」受験許可状況>

受験許可者数 「追試験」 《972人》	事由	
	区分	
	疾病・ 負傷 <838人>	インフルエンザ及び類似症
胃腸炎及び類似症		188人
その他の疾病		128人
負傷		13人
事故等 <134人>	交通機関の遅延	15人
	やむを得ない事由	119人

注. 表中の「インフルエンザ」は、新型及び季節性を含む。
(大学入試センター1月18日発表)

- 新型インフルエンザの感染拡大に備え、治療や万全な試験実施の準備等を考慮し、追試験の実施時期を従来の本試験の1週間後から2週間後の1月30日・31日に遅らせ、試験会場も全都道府県(これまでは2会場)で確保するなど、特例措置が講じられた。

しかし、インフルエンザ等による追試験対象者は上表のとおり972人(うち、インフルエンザ及び類似症は509人)に留まり、当初想定されていた人数よりはるかに少なく、本試験は大きな混乱もなく実施された。

追試験は、47都道府県における各会場(48会場:東京2会場)で実施される予定である。

■科目別平均点等(中間集計:大学入試センター発表、1月20日)

主な科目の前年との平均点差をみてみよう。

- 平均点がダウンした主な科目は、数学Ⅰ・A(前年中間集計値との差。以下、同。-14.4点)、国語(-6.8点)、化学Ⅰ(-15.4点)、物理Ⅰ(-8.7点)、世界史B(-3.0点)、及び現代社会(-1.6点)、政治・経済(-9.8点)、倫理(-2.6点)の公民各科目など。
- 一方、平均点アップの主な科目は、英語(+6.8点。筆記+3.0点、リスニング+5.4点)、数学Ⅱ・B(+6.3点)のほか、日本史B(+3.9点)、生物Ⅰ(+13.6点)、地学Ⅰ(+14.8点)など。
- 英語の「筆記+リスニング」(加重平均による得点率<59.8%>を基に200点満点に換算)は+6.8点となっている。

筆記は第5問のイラスト問題が新形式になり、やや難化したものの、第1問(発音・アクセント)から文強勢問題がなくなったり、総語数が減少したりしたことから、全体としては易化し、平均点もアップしたとみられる。

リスニングは形式、内容ともほぼ前年を踏襲。語数がやや減少して、音声も聞き取りやすく、前年より易化したようだ。

- 国語は例年通りの出題構成と分野(近代以降の文章2題<評論・小説>、古文1題、漢文1題)で、設問数や解答数も変化なし。問題文の分量は評論、小説、古文及び漢文とも減少したが、古文・漢文が難化し、全体として平均点ダウンにつながったようだ。
国公立大ではほとんどが古文・漢文を必答としており、特に国公立大理系志望者にとっては、厳しかったとみられる。
- 数学は数学Ⅰ・Aの大幅ダウンに対し、数学Ⅱ・Bがアップしている。
数学Ⅰ・Aは出題形式に大きな変化はなく、第3問を除いて標準的な出題であったが、思考力を要する出題が多く、難化。特に第3問は直角三角形の内接円の半径、余弦定理、正弦定理、図形をかいて考えるといった、幅広い幾何に対する理解が求められ、かなり難しかったようだ。今回は国立大教員養成系などの文系志望者の受験が増えたとみられ、彼らにとっては大きな痛手であったろう。
数学Ⅱ・Bは出題形式、出題分野とも前年と同様であったが、定型的な問題が多く、計算量も例年より少なく、解答への誘導が丁寧で平均点アップにつながったようだ。
- 地歴では、前年とは逆に日本史Bがアップ、世界史Bがダウン。
文系志望者の受験が多い日本史Bは文化史問題が増えたが、社会外交史が減少し、全体として基本的な問題が中心で、平均点アップにつながったようだ。
理系志望者の受験が比較的多い地理Bの出題内容や出題量は、前年とほぼ同じ。難易度も前年並みで平均点はわずかにアップしている。
世界史Bは前年出題された写真の正誤判定問題から地図問題に変わったり、社会経済史や近現代史からの出題が増えたりして、平均点はややダウン。
- 公民は、各科目とも平均点ダウン。現代社会は例年、公民の中では受験者が最も多いが、前年よりややダウン。設問数や出題分野に大きな変化はないが、やや難化。
倫理は基礎的な知識、理解の設問が目立ち、平均点はダウンしたが、高得点率を維持。
政治・経済は、出題形式が前年とほぼ同じ。しかし、図表の読解問題が難しくなったことなどから、平均点が大幅に下がった。
- 理科は、理系志望者に必須といえる物理Ⅰ、化学Ⅰの大幅ダウン、文系志望者の受験が比較的多い生物Ⅰ、地学Ⅰの大幅アップが対照的だ。
物理Ⅰの大問数は変わらず、解答数が1つ増えた。知識問題が少なくなり、物理的考察力を求める出題や計算問題が増加したことなどで難化したようだ。
化学Ⅰは大問数、解答数とも前年と同様であるが、内容的には考察させる問題が増加。また、計算問題の解答数は減ったが、複雑な計算を要する問題で手間取ったとみられ、全体として平均点ダウンになったようだ。
生物Ⅰは問題の文章量や選択肢数が減り、難しい考察問題も減少し、取組みやすい標準問題が多く出題されたことから、平均点アップにつながったようだ。
地学Ⅰは大問数、解答数とも前年と同じであったが、計算力や思考力を要する考察問題や読図問題が減少し、基礎的な知識問題が増加したため、易化したようだ。

- 大学入試センターから発表された科目別平均点と受験者数(中間集計)をもとに旺文社が算出した5(6)教科7科目(900点満点)の加重平均点は、次のとおり。

- **文系標準型**(地歴と公民各1科目、理科1科目) ; 517.9点(-13.8点)

- **理系標準型**(地歴と公民合わせて1科目、理科2科目) ; 517.1点(-12.8点)

- ここでの文系型、理系型の平均点は、私立大型を含む全受験者の加重平均を集計したものである。実際の理系志望者(5教科7科目)は、平均点が大きくダウンした物理Ⅰ、化学Ⅰに加え、理系志望者の受験が多い公民が軒並みダウンしたことから、文系志望者に比べて大幅なダウンが予測される。

また、理科は、文系志望者の受験が多い生物Ⅰと地学Ⅰが大幅な平均点アップとなっていることから、文系志望者と理系志望者との平均点差は大きく開いたとみられる。

なお、本稿で集計した加重平均点では、物理Ⅰ・化学Ⅰのダウンと、生物Ⅰ・地学Ⅰのアップがちょうど相殺する形となり、文系標準型と理系標準型との平均点差はごくわずかである。

- **文・理系型共通の5教科6科目平均点**(地歴と公民合わせて1科目、理科1科目の800点満点を900点満点に換算) ; 512.8点(前年中間集計値との差、-13.3点)

- 得点調整の対象科目間の平均点較差をみると、**地歴：地理B－世界史B＝4.7点／公民：倫理－現代社会＝10.0点／理科：生物Ⅰ－化学Ⅰ＝15.8点。**

得点調整は、対象科目間の平均点較差が20点以上で、それが問題の難易差に基づく場合に実施される。現時点では、いずれも20点以内に収まっており、得点調整は実施されない模様。実施の有無については1月22日(金)、大学入試センターから発表される予定。

■文系・理系志望者とも、平均点ダウンで“弱気出願”“安全志向”に!?

- 22年入試は、現下の非常に厳しい経済状況と新型インフルエンザといった受験環境に加え、セ試の平均点ダウンで受験生にとってはこれまでにない厳しい状況で入試本番を迎えることになる。

受験生の間では、学費の安い国公立大志向、進学コストを抑えられる地元志向、就職・キャリア形成に有利な資格志向といった動きが例年以上に強まるとみられる。

- こうした動向に加え、セ試の平均点ダウンにより、文系・理系志望者とも国公立大の難関・上位校を敬遠し、準難関校～中堅校を中心とする、“弱気出願”“安全志向”の傾向が一段と強まるとみられる。

国立難関大(学部)志望の上位層にはさほど大きな変化はないとみられるが、難関チャレンジ層が地元周辺の国公立大へ流れ、激戦も予測される。特に、医療・看護系などの地元公立大が狙われそうだ。

- 私立大入試については、前年と同じように、安全志向と併願の絞込みなどから、難関・準難関校の志願者減、中堅校の志願者増などが見込まれる。

☆ ☆ ☆

次ページに、「22年センター試験平均点等一覧」(中間集計)を掲載。

●平成22年度大学入試センター試験平均点等一覧(中間集計)

＜平成22年1月20日 大学入試センター発表＞

教科名	科目名	平成22年(中間)		平成21年(中間)		平均点の 対前年差	
		受験者数	平均点	受験者数	平均点		
文系標準型平均点(900点満点)		—	517.9	—	531.8	▲ 13.8	
理系標準型平均点(900点満点)		—	517.1	—	529.9	▲ 12.8	
国語(200点)	国語	219,642	105.6	207,448	112.4	▲ 6.8	
地理歴史 (100点)	世界史A	1,008	52.9	949	45.0	8.0	
	世界史B	42,481	61.0	41,257	63.9	▲ 3.0	
	日本史A	1,888	48.0	1,855	45.7	2.3	
	日本史B	66,749	62.6	63,519	58.7	3.9	
	地理A	2,037	53.8	2,445	55.2	▲ 1.4	
	地理B	33,215	65.7	33,539	64.9	0.7	
公民 (100点)	現代社会	52,597	59.6	52,371	61.2	▲ 1.6	
	倫理	25,106	69.6	22,624	72.3	▲ 2.6	
	政治・経済	40,009	60.2	35,126	70.0	▲ 9.8	
数 学	数学① (100点)	数学Ⅰ	4,225	42.4	3,999	50.3	▲ 8.0
		数学Ⅰ・A	152,082	49.8	142,816	64.2	▲ 14.4
	数学② (100点)	数学Ⅱ	3,091	37.5	3,130	29.2	8.3
		数学Ⅱ・B	136,800	58.7	127,452	52.3	6.3
		工業数理基礎	6	46.5	17	32.5	14.0
		簿記・会計	443	36.9	392	44.2	▲ 7.3
	情報関係基礎	227	60.8	219	60.3	0.5	
理 科	理科① (100点)	理科総合B	5,178	64.9	5,865	58.2	6.8
		生物Ⅰ	65,413	70.4	65,320	56.8	13.6
	理科② (100点)	理科総合A	8,089	66.9	9,383	58.4	8.6
		化学Ⅰ	80,949	54.7	81,957	70.0	▲ 15.4
	理科③ (100点)	物理Ⅰ	58,950	55.2	60,581	63.9	▲ 8.7
	地学Ⅰ	8,757	69.7	9,844	54.9	14.8	
外国語 (200点)	英語	筆記(200点)	224,219	119.8	220,807	116.8	3.0
		リスニング(50点)	221,357	29.7	225,783	24.3	5.4
		筆記+リス(200点)	—	119.6	—	112.8	6.8
		ドイツ語	91	152.8	66	151.8	0.9
		フランス語	144	136.5	122	144.4	▲ 7.9
		中国語	213	139.7	235	140.9	▲ 1.2
		韓国語	108	147.8	80	171.4	▲ 23.6

- ＜注＞① 文系標準型平均点(900点満点)は、国語(200点)、地歴(100点)、公民(100点)、数学①(100点)、数学②(100点)、理科①、②、③合わせて集計100点)、外国語(200点；英語は筆記＜200点＞＋リスニング＜50点＞の得点率を基に200点換算)の加重平均点。
 ② 理系標準型平均点(900点満点)は、上記文系型の地歴と公民を合わせ(1教科として集計100点)、理科を2科目①、②、③の各加重平均点の合計×2/3＝200点)、とする5教科7科目の加重平均点。
 ③ 文系・理系とも、大学入試センター発表の科目別平均点(小数第2位まで)と受験者数をもとに旺文社が算出(小数第1位まで)。
 ④ 表中の「平均点の対前年差」は、四捨五入の関係で「22年－21年」と一致しない場合もある。▲印はダウンを示す。
 ⑤ 5教科6科目(文系・理系共通の800点満点を900点満点に換算)の加重平均点は512.8点で、21年(中間)より13.3点のダウン。
 ⑥ 地歴(各B科目間)、公民、理科(各I科目間)における得点調整は、「生物Ⅰ」－「化学Ⅰ」の15.8点が最大だが、実施されない模様。